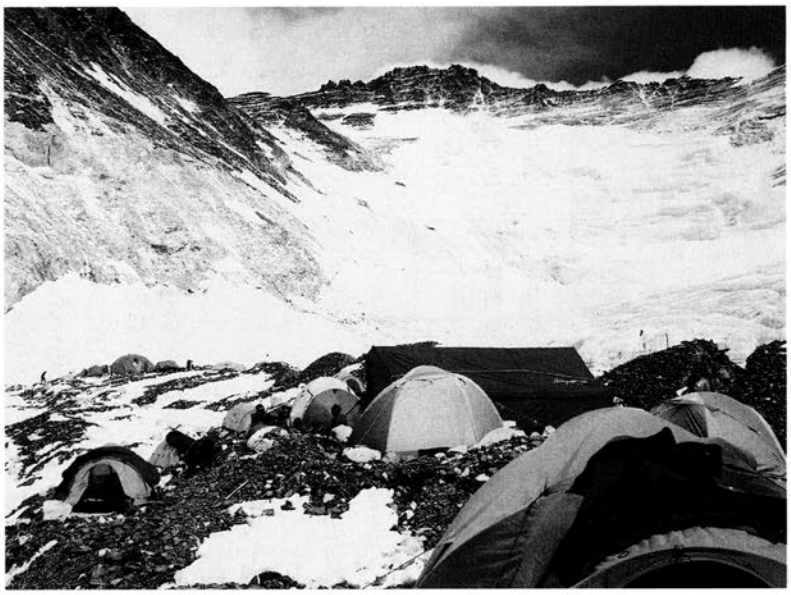
第676号平成13年9月20日発行（毎月20日発行）
昭和49年8月31日　第三種郵便物認可

31年ぶりのクムジュン

平林　克敏



エヴェレスト第2キャンプからローツェ　大量のモレーンが露出している（いづれも川田哲二撮影）

二〇〇一年三月二十三日、私はエヴェレスト山群の裾、クムジュンというシェルパの村の、丘の上に立つエヴェレスト・ビュー・ホテルの一室で、この原稿を書いている。

某協会から「ヒマラヤの環境」について書くことを依頼され今回の小旅行を思い立った。その折に気付いたことを本稿で紹介し、何かの参考になればと思う。

前方の窓ガラスを通して、三十一年前（一九七〇年）に私たち日本隊が登った最高峰エヴェレストが夕日に輝き、この丘をぐるっと取り巻くように、五〇〇〇～六〇〇〇メートル級のヒマラヤの峰々が連なっている。富士山より少し高い約四〇〇〇メートル付近が、東部ヒマラヤの森林限界となっているから、この丘は冷温帯性の針葉樹林のヒマラヤモミ、ツガ、トウヒなど日本や北米などと類似した植生に覆われ、シャクナゲやカエデ、トゲ低木林などと混在しながら、のどかな山麓を形成している。

やがて日が沈むと前方の尾根に立つタンボチェのラマ寺に電灯が灯り、その横、モン峠の村からもちらちらと灯りが見える。

この付近のシェルパの村全体に電灯が引かれ、街灯まで設置されている。あれからの長い歳月を考えると、電灯が灯ることは当然としても、何かが大きく変わりつつあることを肌で感ずることができる。強い印象として残っている三十一年前のあの荒々しく厳しい自然の姿と異なり、あまりにも穏やかに感じられるのは何故だろうか。

2001年（平成13年）
9月号（No. 676）
社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価1部　150円

目　次

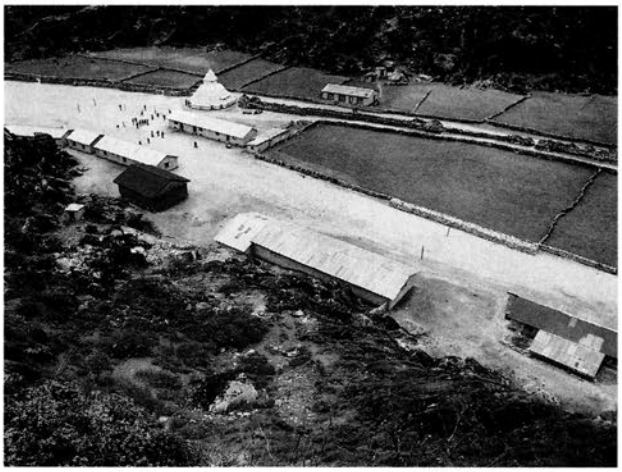
31年ぶりのクムジュン ……1
海外の山……5
報告
　第43回有志閑談会……6
　丹水会・今倉山山行……7
　00同期会・結成記念集会……7
Climbing & Medicine・1……8
支部だより
　岐阜・春季小集会と左門岳…9
　岐阜・有明会の対馬山行……9
　宮崎・石鎚山、三方岳山行…10
平成13年度海外登山基金助成登山
　計画募集について……11
東西南北
　ヘルマン・ブールのピッケル・12
　残雪のグラン・サンベルナール
　……15
　2000m以上の山全山登頂…16
Sanken Life ……18
図書紹介……19
『山の社会学』『問いかける山』
『日本の岩場』
会務報告……20
新入会員・図書受入報告……21
INFORMATION……22
ルーム日誌……23

▶日本山岳会事務（含図書室）取扱時間
　月・火・木 ……10～20時
　水・金 ……13～20時
　第2、第4土曜日 ……閉室
　第1、第3、第5土曜日…10～18時
▶10月15日（月）創立記念日（振替）休室

■後退を続ける氷河

鋭利な刃物で切り取ったようなヒマラヤ・ヒダといわれる氷河の壁は、輝きを失い、頂上から急斜面を覆い、氷棚のようにせり出していた氷河が、大きく後退し、すぐそこまで流れ下っていた氷河の舌端も何百㍍も後退し、モレーンに覆われ、黒ずんだ谷に変わっている。

今回の私の旅の目的の一つは、この谷に開けたシェルパたちの生活や自然環境が三十一年前とどのように変わっているか知りたかったことである。



クムジュン・スクール全景　ストゥパの手前が寮と職員室

JACの本隊がこの付近を通過したのは、三十一年前の三月五日のことであった。休養と高所順応のため、タンボチェに滞在し周辺の小旅行をすませ、ベースキャンプを建設したのが、三月二十五日だったから、私のこの周辺の環境に対する認識は当時のままで、驚きも大きかった。

規則正しく切り出された石積みの真新しい家々が建ち並び、こざっぱりとしたシェルパ族の生活が営まれているが、ナムチェからクムジュン、タンボチェなどの周辺の山々は丸坊主に変わっている。最近では、材木を切り出すためには、その都度地方政府の許可が必要となり、歯止めはかかっている。このため高所に住む住民が必要とする窓枠や屋根等の構造部材はすべてルクラの下流から運び上げている。

農耕や牧畜、基本となる食生活などには大きな変化は見られないが、インドやネパール産の安い嗜好品や衣類は見違えるほど豊富で消費が進んでいる。安物の中国製品を満載した商隊がチベットからナムチェに入り、市場も開いている。

周辺の山々を覆う氷河の状態は、持参してきた三十一年前の同時期に撮った写真と比較してみると、明らかに氷河は小さく、やせ衰え、後退を続けている姿がよくわかる。

私が四十一年前、初めてヒマラヤ遠征を共にし、西ネパールの横断をはじめ、エヴェレスト登山の折も輸送隊のサーダーを務めてくれたシェルパのペンバ・テンジンは七十歳の高齢ながら、ただ一人健在で、この地で私を出迎えてくれた。彼は言うのである。

エヴェレスト山麓のここ二十年の変化は大変なもので、降雪量に変動が大きく、暖冬が続いていること、ヤクや羊の放牧地も従来四五〇〇㍍付近が限界であったが、今では放牧テリトリーが広がり五〇〇〇㍍程度まで高度を上げている由であった。また、あの山の懸垂氷河は、一昨年大崩壊して消滅してしまったと指差すところには、以前に照り輝いていた美しい壮観な姿を見ることはできなかった。

そこに住む現住民の発言ほど、周辺環境の変化を的確に指摘する声はない。ヒマラヤの奥深くで生活するシェルパたちにとって気候変動は重大な関心事であり、伝統的な農耕や遊牧の知識と豊富な経験によって生きてきた彼らの発言は、急速に進む地球温暖化を明確にとらえ訴えているのである。

南極や北極など極地ほど温暖化速度が速く、地球平均を数倍上回ることが最近報告されている。その中でも、立体的極地と言われるヒマラヤの高峰を覆う氷河の溶け出す速度は、この三十年、急速に早まっていることが指摘されている。

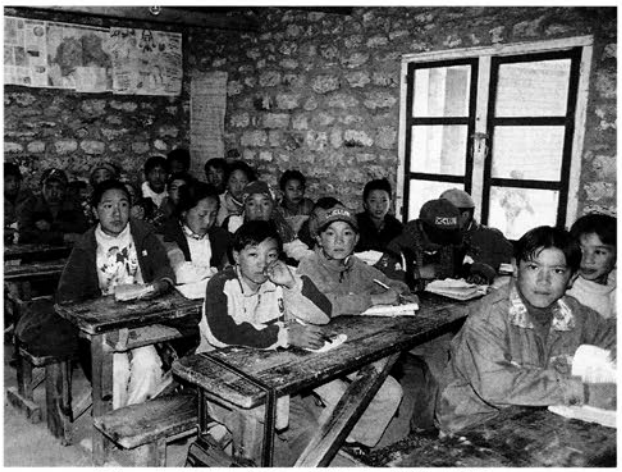
一九六九年の秋、私たちエヴェレスト登山隊の偵察隊が、五三〇〇㍍付近で、一つの遺体を氷河上で発見した。その遺体は六年前、一九六三年春の米国エヴェレスト登山隊で遭難したオレゴン州立大学の助手で、当時二十七歳のジョン・E・ブライテンバッハのものであった。

氷塊が崩れ落ち、クレバスの間に埋まる事故によるものであった。事故の起きた五九〇〇㍍付近から、六年半の間で高度差約六〇〇㍍、距離にして約二三〇〇㍍を流れ下ったことになる。この氷河上層部

の流動は当時の氷河学の常識を超えた著しく速いものであった。

当時から私は、エヴェレストのアイスフォール崩壊の凄まじさや氷塔の動きに多くの疑問を持っていた。英国隊の一九五三年、米国隊の一九六三年、日本隊の一九七〇年、そして一九八〇年ポーランド隊の写真などを比較してみると十年毎に、刻々と変貌していくアイスフォールの姿がよくわかるのである。

アイスフォールと呼ばれるような地形では、氷河の流動が上層部と下層部の二つの流れができ、この二層の流れの中に大きな差があると考えない限り説明のつかないことが多いように思われる。このことについては、専門家の判断を待たなければならないが、アイスフォールの崩壊していく状態を見る限り、そのように思えてならないのである。体育館ほどの氷塔が折り重なったあのアイスフォールの姿は今はなく、スキー場のように変貌してしまったと極端に表現する人さえあるほどだ。ヒマラヤの谷氷河は確実に、かつ急速に進む地球温暖化を何よりも如実に物語っているのである。



教室の古びた机と椅子、子供たちの服装は真新しい

シベリアとアラスカ・カナダ北西部の気象記録から過去三十年間で、十年にほぼ摂氏一度の割合で気温が上昇したことがわかっているが、ヒマラヤでは他の極地よりさらに速く、三十年間で摂氏三・五度も気温が上昇していることが報告されている。地球平均の上昇より、二～三倍の速さで温暖化が進行していることになる。

ヒマラヤ山脈を覆う氷河や植生、この自然の摂理とバランスは何億年もかけて地球が育んだ本来の姿を示すものである。私たちは地球の温暖化の事実を知識として頭の中で理解し、環境問題をとらえても、これにどのように対応してよいのか戸惑うことが多いのである。多くの環境問題は国家単位だけでなく世界的に取り組まなければ解決できない問題がほとんどであるけれども、今私たちが最も大切にしなければならないことは、個人の生活範囲において、また山岳会という一つの団体において環境問題を自らのこととして受け止める態度と、個人の行動規範、これを支える価値観や倫理観を構築していくことが第一に望まれるところである。

特に、ヒマラヤや極地などの登山や野外活動にたずさわる者は、その行動規範として環境問題について指導的な役割を果たして行く必要があろうと思う。

■クムジュン・スクール

変貌を遂げていくこの付近の村村のなかで、やはりクムジュンの村が一番豊かで、落ち着いた発展を遂げているように思える。

ヒラリー卿が一九六一年に開設したクムジュン・スクールは昨年四十周年を迎え、四月二十五日にヒラリー卿と夫人が出席し、式典が行われた。四十七名の裸足で粗末なシェルパ族の子供を迎えてスタートしたこの学校は、今では三百五十名あまりの学生と十六名の先生とスタッフにより維持されるまでに拡大している。

ヒラリー卿が会長を務めるヒマラヤン・トラストがこの事業支援の主体となっており、学校のほか病院の建設、水道の供給など、ニュージーランドをはじめ、カナダ、米国、ドイツ、英国などの幅広いチャリティー支援を受け、運営されていることは周知の通りである。この学校の卒業生は、カトマンズをはじめ、ソロ・クンブ地方で起業家として、またビジネスマンとして様々な分野で大活躍している。

この四十年間に卒業したシェルパ族の立身出世と生活の豊かさは他の部族と比較し際立っていると言える。単に経済的に豊かになったというだけではなく、身につけた教育はヒマラヤ登山やトレッカーなどと接することにより豊かな経験を育み、今やネパールの中で指導的な役割さえ果たそうとして

いる。

その一例をあげると、一九六三年私が西ネパールの横断とサイパルに登山した折に雇い、その後一九七〇年のＪＡＣのエヴェレスト隊にも参加したカミ・パサンは二年前に他界していたが、彼の七人の子供は全員この学校で学び、一人はエヴェレスト・ビュー・ホテルのマネージャーとして宮原巍氏の片腕となって活躍し、他の一人はロシアでパイロットの資格を取得し、ヘリコプターでネパールの各地を飛び回っている。

また、三男のパサン・ダワは日本の旅行者やヒマラヤ登山隊がよく使う、アジアン・トレッキング社のマネージャーとして、またヒマラヤン・トラストのオフィス・セクレタリーとして英語を自由にあやつり、ヒラリー卿の仕事を推進する委員会のメンバーに名を連ねている。

ヒラリー卿の残した教育の功績は四十年を経て、今日、ますますその輝きを増している。低開発国における教育の力というものは、大変都合よく商業活動を展開することに役立つため、地方文化の中に大きな歪みを作り、支配階級としての地位を築いてしまうものである。今や、シェルパたちは、ヒマラヤ登山の支援やトレッカーから得た多額の資金をもとでに別の道を歩もうとしている。言われるまま、金さえ払えばの登山隊やトレッカーのもたらした安易な行為が各方面で混乱をまねき、良識ある人々から顰蹙をかっていることも事実である。

私とともにエヴェレストに登頂したチャタレー氏も二年前に亡くなったが、長男はルクラとナムチェ・バザールの中間にあるパクデンで茶店とロッジを経営していたし、長女もその近くに嫁ぎ、立派なロッジを持っていた。

現在ネパール男性の平均寿命は五十三歳というから、私が最初にネパールに入った四十一年前のシェルパたちはもとより三十年前のエヴェレスト登山に雇った高所シェルパも、二十六名中十八名が他界していた。

既に時代は替わり、エヴェレストやそれ以降の日本隊のために活躍してくれたシェルパの子供たちが地元のクムジュン・スクールで学び成長し、それぞれの道を逞しく歩んでいる姿に接し、日本人のヒマラヤ登山とシェルパたちとの関係を考えさせられる旅であった。

高所民族の生活が豊かさを増す一方で、首都カトマンズはスモッグの立ち込める騒音と公害の都に変わりはて、見る影もなかった。政治と経済の不安定さに加え、世界最貧国の一つネパールの姿はヒマラヤを知る私たちに、また別な問題を投げかけているのである。

私はソロ・クンブ滞在中クムジュン・スクール校長のマヘンドラ氏に、カトマンズではヒマラヤン・トラスト責任者であるアン・リタ氏にお会いした。

ヒラリー氏がはじめに寄贈した四十年前のアルミ製の建物もそのまま使われているが、施設全体は未だたいへん粗末なものであるから、将来計画として、①室内暖房設備　②インターネットアクセス③建物のメンテや教室内の机・椅子の整備　④学生寮の建設　⑤職員室等、事務棟の建設、などを急ぎ充実させたいとのことで予算書が添付されていた。

日本のＮＰＯ組織やロータリー、旅行団体等が支援を申し出ているようであったが、一過性のものが多く、内容を聞くと支援の方法や考え方に短絡的なところがあるように思え必ずしも賛成できない。

一般的に資金援助を行う場合は、支援する団体や組織を充分に見極め、実行性のあるお金の使い方を考えなければ意味がない。植林活動などについても一、二度現地を訪れて写真を撮って帰ればよいというものでもない。そこには長期的、継続的なビジョンや目的が必要であり、その場しのぎの支援活動は慎むべきものと思う。

無論、立派な支援活動を実施している事業も多いことは承知しているが、流行に乗って雪崩現象のような支援活動は、その国にとっても必ずしも有益ではないと思う。

特に一般旅行者や地方団体等が寄贈する多量の文具や運動用品などが一個所に集中し、他の地方の子供との格差やその使途について問題が多く、考えさせられることが多い。「一部の団体の最近の活動について大変疑問」との宮原巍氏の言葉も当然と思えた。

百周年を迎える日本山岳会がネパールに対し、さらに何ができるかの見極めもしたかったが、残念ながらそれを提案するまでには至らなかった。

海外の山

62年前のヒマラヤ越え

チベット潜行記録刊行

江本　嘉伸

八月十七日夕、鹿児島県指宿市のホテルで、一冊の本の刊行についての報告とお祝いを兼ねる会が催された。主役は、隣町の山川町で二十年教育委員を務めた八十四歳の元農協職員。家族、親戚のほか町長はじめ一部の知人を招いただけのささやかな集まりだったが、皆が待っていた本の完成だけに、座は大いに盛りあがった。

参会者が手にした待望の一書の名は『チベット潜行　1939』（悠々社刊）。著者はこの日の主役、野元甚蔵である。題名通り、六十二年前、チベットに潜行したときの体験をまとめたものだ。

関東軍のモンゴル語研究生として、内モンゴルの草原に住みついていた二十二歳の野元甚蔵に「チベットに行かんか」と声がかかったのは、一九三八（昭和十三）年十月だった。

「チベットについて全く知らなかったし、関心もなかった。なぜ私なんかに、と思いましたが、知らない所もおもしろい、と若気の至りで引き受けてしまいました」

老校長の雰囲気を漂わせる穏やかな表情で、野元は若き日を回想する。

当時、北京にパンチェン・ラマの高弟であるアンチン・フトクトという活仏が来ていた。フトクト（ホトクトとも）は、活仏を意味するモンゴル語である。そのアンチン・フトクトがシガツェに帰るにあたり、野元甚蔵という青年を同行させてやってほしい、と関東軍の幹部が依頼したらしい。野元はアンチン・フトクトの秘書、王明慶の協力で一九三九（同十四）年二月、カルカッタからインド入り、カリンポンでアンチン・フトクトと対面、五月九日、チベットに向けてヒマラヤ越えの旅を踏み出した。シッキムを抜けてギャンツェに出る、一九〇四年、英国の軍隊がチベットに侵攻した時にとったルートである。

21歳の野元甚蔵
（昭和13年2月18日撮影）

「山道は行き止まりになって、急勾配の岩壁が立ち塞がっている。皆、馬を下りて手綱を引き、足場を見極めて木の根や岩角につかまってよじ登る。馬は前と後ろから気合を入れて引っ張り上げる…」と、ヒマラヤ越えの一場面を野元は報告している。五月二十四日、カリンポンを発って十六日目に無事シガツェに着いた。

メモはとれなかった。一年半の滞在後、記憶を頼りに「入蔵記」を書き、報告書としたが、すでに太平洋戦争を目前にした日本軍にチベット報告を検証する余裕はなかった。「入蔵記」は極秘扱いのまま、外交資料の片隅に放置されていたが、戦後知人がコピーを取って野元に送ってくれた。今回の本は、それをもとに書きおろした。

「そこにおればいい」と言われた野元甚蔵が遭遇したのが、ダライ・ラマ十四世誕生に湧くチベットだった。チベットの独立に命をかけたダライ・ラマ十三世は、一九三三年十二月十七日急逝した。その転生者探しは三五年春になって始まり、やがて、アムド地方（現青海省）の農家でひとりの聡明な少年を見つけた。この少年がラモ・トンドゥブ、現在のダライ・ラマ十四世である。

十月八日（チベット暦八月二十五日）、歓迎の歌と音楽が奏されるなか、ラサに入った。野元も十月半ば、中国で仕入れた品物を売りさばくため、王明慶がラサに行くと聞き、同行を希望する。ラサで一ヵ月を過ごすなかで、市内でラモ・トンドゥブ一行の行列と遭遇した。本人はテルジャムと呼ばれる輿（こし）の中で姿を見ることはできなかったが、掃き清められ、香がたかれた道路をゆっくり進む行列の光景を野元は忘れたことがない。

一九八〇年、ダライ・ラマが鹿児島を訪れた際、紹介されて法王にチベットでの体験を話した。その際「本を書きましたか？」と聞かれ、「お世話になった人たちに迷惑をかけては、と思い……」と首を振った。それがこの夏実現した。

六十二年前のチベット報告、「解説」は筆者が担当した。一冊はインドのダライ・ラマに届けられたはずだ。

報告

REPORT
9月

日本山岳会の各委員会
同好会の活動報告です。

第四十三回有志閑談会――都心を離れ高尾で開催

第四十三回有志閑談会が六月九日、緑美しい高尾の奥座敷「うかい鳥山」で開催された。例年、梅雨時に行われるこの会合はいつも雨に悩まされたが、今年は幸運にも絶好の快晴に恵まれ、少し遠出となったにもかかわらず、出席者は三十名であった。

会場は六千坪の敷地に五箇山の合掌造り、加賀前田侯の茶室など、それぞれに日本建築の粋を集めた三十八棟の客室、庭には水車の回る清流が流れ、素晴らしい山水の世界を形づくっていた。

参加者はこの広い名庭園を見ようと開会前から大勢で押しかけ、渓谷美や造園技術など日本古来の山水の妙を愉しむ。吉日とあって結婚式の花嫁姿なども加わり、例年とは違った雰囲気である。

世話人は昨年と同じく、中川武、川上智津子の両会員である。受付と同時に世話人気配りの参加者名簿と欠席者の近況、コメントが配布された。

会場は広い敷地に点在する客室のひとつ「桂・かつら」。定刻の十三時、世話人の司会により開会。会場が例年行われていた小石川後楽園の函徳亭よりこの「うかい鳥山」に移った経緯の説明があった。それによれば今年は函徳亭の予約が抽選となり、三人で争ったが抽選漏れとなっていつもの部屋が確保できなかったので、この機会に都心を離れ心機一転、足を延ばしてここを選んだ由。続いて松丸秀夫名誉会員による百年史解説つきの乾杯の音頭となり、閑談会本来の姿である懇談に移った。

閑談とは事典によれば「暇つぶしの無駄ばなし」「当面の問題と直接関係のない話」とあるように、まさに清談が続いた。しかしこの清談中にもやや泥臭い中川会員による渡辺兵力名誉会員の欠席理由の説明や、山田二郎元会長よりミッテルレギ山小屋再建に伴う寄付について、百五十万円の目標に対して二百八万円の応募があり、感謝している旨の報告、ブラバンド氏の消息などが伝えられた。

この間次々に風雅あふれる青竹筒に入った銘酒や、当店自慢の薩摩地鶏の炭火焼をメインにした鯉の洗い、吸い物、鮎の塩焼きなどの料理が並び、由緒ある閑談会にふさわしい雰囲気に、一同心ゆくまで飲み食いかつ話し合った。

宴半ば、会員番号順に書かれた名簿にしたがって自己紹介が始まった。まず二五六三番の木下是雄会員、途中で時間切れとなってしまったが、遠来の吉村健児北九州支部長を飛ばしてしまうハプニングもあって笑いが起こる場面もあった。話題となったのは特異な「日本山岳会滅亡論」で知られる西丸震哉会員のまたもユニークな「第二山岳会論」や、ＪＡＣとゆかりの深かったネパール王室の惨劇などであったが、みな山岳人生経験豊かな、さすがはＪＡＣの長老の話と聞き入った。

最後は麦とろご飯と甘味が出された。終了予定の十五時となったが時間を少し延長して、いつも発言が少ない女性会員全員に一言ずつ話していただいた。由緒ある伝統の閑談会への参加を心から喜んでいる旨の発言が多かった。

フィナーレは恒例の記念撮影。水芭蕉が一面に広がる庭園に集い、羽田栄治会員のカメラでパチリ。

水芭蕉の咲く庭園で記念撮影

後は来年の再会を約しつつ高尾登山口駅へと向かった。（小倉　厚）

丹水会

第四十回例会　今倉山山行

六月三十日、山梨県道志村の民宿光荘で四十回を記念する丹水会の例会が、五十三名の参加者を得て開催された。

懇親会に先立って、家伝では築約四百年という茅葺きの民家、山内家住宅の座敷で講話が行われた。講師は丹水会会長で、本会前副会長の大森薫雄さん。五月二十一日からの明治大学山岳部ガッシャーブルムⅠ・Ⅱ峰登山隊にドクターとして同行されたが、その時のベースキャンプまでのバルトロ氷河キャラバンの模様を写したスライドをもとに高度順化の様子などを交えての話であった。

今倉山山頂を33名で往復

さらに「〝老い〟を楽しむ」という話が続いた。WHOの統計によると日本人の平均寿命は世界一、喜ばしいことであると同時に高齢社会という大きな問題を抱えることになる。医学上の統計などから、お年寄り扱いのいらない五十五～七十五歳までをヤング・オールド、七十五歳を超え日常生活上特別なケアが必要になる世代をオールド・オールドとすると、このオールド・オールド世代にとって深刻な問題の一つに「ぼけ」がある。「ぼけ」の大半は脳を使わない、体を動かさないことからくる生活習慣病ともいわれ、その対策として大切なことは、心の底から楽しいと思えることをすること。それが脳を刺激し、感情を活性化することの必要性を説いた。

翌七月一日は梅雨の最盛期にもかかわらず、宿の前から山開きの富士山がくっきりと望める快晴の朝を迎えた。全員で記念写真を撮った後、道坂峠まで十台余の車に分乗して、三十三名で今倉山（一四七〇㍍）から松山（一四五〇㍍）を往復した。

深い緑の中、ウグイスやセミの声を耳にし、足元はオダマキ、ギボウシなどの可憐な花に迎えられて、峠から七十五分ばかりで十時過ぎには今倉山頂に到着。今倉山から松山への鞍部への下りで、見下ろした真っ白なヤマボウシが緑の中で鮮やかだった。松山の山頂は切り開きがあり、富士山が目の前だった。

今倉山に戻りビールで乾杯、昼食をとり、往路を道坂峠へ十三時半下山。都留や山中湖方面へ帰る組と別れ、山の汗を道志村が運営する道志の湯で流して散会した。

（大橋　晋）

00同期会

結成記念集会と山行

二千年紀に入会した者百九十二名の同期会です。有志メンバーによる準備会、第一回目集会の立案、会場確保、記念の山行計画など万端手配。JAC事務局の助言と、

6,000m以上の1,215峰を全て所収
世界初の精密登山地図　完成！！

宮森常雄 著（ヒンズークシュ・カラコルム研究会）

カラコルム・ヒンズークシュ登山地図

Mountaineering Maps of the KARAKORUM & HINDU-KUSH
by Tsuneo Miyamori

B全判地図13葉

〔付〕カラコルム・ヒンズークシュ山岳研究（宮森常雄　雁部貞夫　共著）

A４変型判・上製美装ケース入　385ページ

◎好評発売中！！　定価（本体33,000円＋税）

国内外の多くの登山家・探検家による最新情報を刻み込んだ世界で最も詳しい登山地図がついに完成！全て経緯度を位置付け、既登峰・未登峰を明示。氷河地帯の知りうる限りの情報も満載。別冊山岳研究では貴重なパノラマ写真に高度と山名を添えて掲載。現地言語による地名山名研究と併せてヒマラヤ全域の知識を提供する。

ナカニシヤ出版
〒606-8316 京都市左京区吉田二本松町2
Tel.075-751-1211　Fax.075-751-2665
URL http://www.nakanishiya.co.jp/

2000年入会者による初の同期会

切手、封筒、印刷物の補助も受け、全国の同期会員に趣意書と結成記念集会の案内状を四月に発送。同時に会報「山」四月号にも記事を掲載してもらった。

こんな、ワクワクする心楽しい雑事は先輩会員が経験した同じ道程だろう。

わが00同期会の結成記念集会と山行は次のとおり。好天に恵まれ、三十三名の参加があった。

日程　六月九～十日　一泊二日
会場と宿泊　富士山麓・忍野高原
　杉並区立富士学園
記念山行　高座山　（三渡　忠臣）

Climbing & Medicine・1

登山隊員は遺伝子で選別される？

大野　秀樹

われわれは、経験的に高所に強いヒト、弱いヒトがいることを知っている。従来、これは“体質”の違いという曖昧な言葉で説明されてきた。しかし、最近の分子生物学の発展のおかげで、遺伝子によってこの謎解きができる可能性がでてきた。

1998年、Montgomeryらは、Nature誌に非常に興味深い発表を行った。すなわち、アンギオテンシン変換酵素（angiotensin-converting enzyme：ACE）の対立遺伝子（アレルという。染色体の相同な場所に位置し、機能的にも相同な遺伝子）が一流の登山家に優位に存在することを明らかにした。血管内皮細胞に存在するACEは、アンギオテンシンⅠを強い生理活性をもつアンギオテンシンⅡ（AⅡ）に変換する。この反応はおもに肺胞で起こる。AⅡは細動脈を収縮し、飲水行動や抗利尿ホルモン（AVP）、副腎皮質ホルモン（ACTH）の分泌を促進する。

さらに、心血管系組織をはじめとする様々な細胞の肥大・増殖、または分化・成長に関与する生理作用も明らかになってきた。ACE遺伝子は第17染色体q23にあり、大きさは21kb（21,000塩基対）で26エキソン（遺伝子DNA中で情報をもっている部分。情報のない部分をイントロンという）からなる。イントロン16に287塩基対の挿入／欠失による制限酵素断片長多型があり、Alu様配列（ヒトゲノム中に散在する小型―300塩基以下―の反復配列）を有するものはI(insertion)アレル、持たないものはD(deletion)アレルと呼ばれている。

25名の一流英国男性登山家（7000m以上の高山に無酸素登山歴がある）のうがい液中からDNAを抽出し、PCR法（DNA鎖の特定部位のみを繰り返し複製する反応で、微量のDNAを百万倍程度まで増幅できる）により測定されたACE遺伝子型は、一般英国人と比較してⅡ型の占める割合が登山家で有意に高く、逆にDD型は著しい低値を示した。特に、無酸素で8000m峰の登頂を果たした15名にはDD型が全く認められなかった。一方、Ⅱ型のほうが血清ACE活性が約半分しかないにもかかわらず、DD型と比べて運動トレーニング効果がはるかに高いこともわかっている。ID型は、いずれもⅡ型とDD型の中間を示した。

こうして、超高所登山の際には、ACE遺伝子による隊員のスクリーニングが行われる可能性が生じてきた。DDアレル所有者にとってはショッキングなことに違いない。

なお、ACEアレルの検査は比較的簡単に実施できる。かかりつけのドクターと相談されたい。

JAC 支部だより

全国各地の支部から，独自の活動状況をリポートします。

岐阜支部

春季小集会 左門岳（能郷白山）

五月十三日、根尾樽見駅前七時集合。少し早い時間だがほとんどの人が集まっていて、七時十五分の列車で到着の人が最後。二十七名全員がそれぞれ車に乗り合わせて、登山基地となる奥美濃発電所、上大須ダムの最奥地へ出発した。少し寒さを感じるが天気は上々。車止めで下車、各班に分かれ登山開始。

最初は谷に沿って林道を歩く。植林用に造られた荷揚用のモノレールに沿って進む登山道はしっかりしている。途中から左の沢に分かれて登る。広葉樹林の中を歩くのだが、昨年はもっとうっそうと茂っていた。現在は間引かれて下枝が払われ、明るい登山道となっている。谷をはさんだ対岸の尾根を見ると、下刈りされた間が植林されているようだ。ここもそのうちに針葉樹が植林されるのではないかと思われる。

山菜には少し遅かったが、コシアブラ、モミジガサ、ミツバ、トリアシショウマ、ヤマブキ、ウド、ワサビなど、たくさんではないがいろいろ採れた。

好天に恵まれ、新緑の左門岳を歩く

山頂では屏風山が西にどっかりと聳え、まだ谷間にはたくさんの雪が残っている。その奥には雪を抱えた能郷白山、北には白山が真っ白な姿を見せている。少し足を伸ばして東のほうへ行けば、木立の間から平家岳、美濃平家岳など奥美濃の盟主たちが顔を見せてくれる。

全員集合したところで、恒例により支部長の音頭で万歳、長老によるビールの乾杯で楽しい宴会が始まった。遠来の人たちもいて、酒に話に花が咲き、あっという間に時間が過ぎてゆく。

かつては奥美濃の代表的な藪山「左門岳」も、近年の電源開発で昔の面影は全くない平凡な山となってしまった。藪山を期待していた人たちは残念だったろうと思う。それでも新緑の山歩きはよい天気に恵まれて、快い汗をかきながら、初夏の一日を楽しく過ごすことができた。

（藤井　法道）

有明会・対馬山行

岐阜支部の有志で発足した「有明会」も今年で十年目を迎え、五月二十五日から三日間、長崎県対馬で山行集会を開催した。

名古屋をはじめ羽田、大阪、小松などから駆けつけた参加者二十余名は福岡空港に一旦集合、再び空路で昼前には対馬に降り立った。昨日までの雨がウソのように晴れ渡った空港を後に、待たせておいたバスで今日予定の「有明山」登山口、厳原町上見坂に向かう。この山は「対馬の嶺」とも呼ばれ、万葉集にも詠まれた歴史ロマンあふれる名山で、厳原の港などから一番目立つのもこの山でもある。山頂には池塘が点在し、広い草原からの眺望は素晴らしい。天候のよい日には壱岐の島影や松浦の

ワインを直輸入しています

主にフランスはブルゴーニュのワインを中心に輸入しています。
こだわりの無名ドメーヌを発掘!!　今、ワイン界に新風を送っています。
SO2の少ないピュアなおいしいワインを、毎年フランスに行き
ドメーヌから直接買いつけています。素晴らしいおいしさです。
ぜひお試しください。全国発送いたします。ホームページをご覧ください。
http://www.winedou.co.jp/
トップコンテンツのマキノリポートは山とワインのリポートです。
メールマガジンもよろしく。

マキノ酒店有限会社　牧野 菊生（会員8299番）
千葉県印旛郡富里町日吉台5-10-7
TEL：0476-93-2200
FAX：0476-93-7548

●日本ソムリエ協会関東支部ワインアドバイザーコンクール入賞　●フランス食品振興協会（ソペクサ）認定コンセイエ（小売店のソムリエ）　●ワイン総合研究所公認名誉ワインマスター

歴史ロマンあふれる対馬の有明山で

山々を見ることもできる。

よく整備された登山道を二時間足らずで山頂に立った参加者は、それぞれ思い思いの時を過ごし、厳原町役場へ向かって下山。途中で宗家十万石の城下町を象徴する一門の墓所、萬松院や武家屋敷跡など歴史の面影を散策して一日目を終えた。

二日目は有明山より少し北に位置する「白嶽」に登った。この山は照葉樹林のアカガシに覆われた上部に、白い石英斑岩の岩峰や岩骨が幾つも突き出た特異な山容で、対馬の名山である。山稜一帯には日本と朝鮮の混交林でチョウセンヤマツツジ、イワシデなど、ここでしか見られない貴重な群落を見ることができる。

登山口は、州藻バス停から三キロほどで車止めとなり、その少し先に立派な標識がある。二時間足らずで登った西峰山頂からの眺望は三六〇度、澄み切った日には韓国の山影を見ることもできるらしい。三角点ピークへは、上見坂への道を途中で右折して登り返しとなるが、極端に踏み跡が不明瞭になるので、慣れない向きにはすすめられない。

日露戦争当時の陸軍省要塞地帯を示す石柱の立つ十字路を稜線沿いに登れば、岩峰の上の二等三角点は間近で、そこからも素晴らしい眺めが堪能できる。本道に戻り、昨日の有明山登山口の上見坂まではよく整備されており、一時間半くらいで行くことができる。

待たせておいたバスで午後四時過ぎには宿に入り、早速お湯に浸った後は、時の過ぎるのも忘れ山登りの余韻に酔い痴れた。

三日目（最終日）は島内を観光。日本で唯一残る旧藩時代の舟だまりの跡や、対馬藩が人力で掘ったという瀬戸などを見て回った。その後、来年の巻機山での再会を約し、午後一時には船で福岡港に着き、それぞれの帰路に向かった。

（藤井　法道）

今年もさんけんで会いましょう

宮崎支部

石鎚山・三方岳山行

■新たな感動、クマザサの原野

「けふもまたこころの鉦をうち鳴しうち鳴しつつあくがれて行く」（牧水）、参加者二十二人の誰もが同じ思いで四国・石鎚山に憧れていた。

七月十九日二十一時三十分、宮崎市をマイクロバスで出発。国道一〇、三二六、五〇三、カーフェリー、国道三三号を快調に走り、十二時間後の二十日九時三十分、石鎚山登山口土小屋に到着。長旅の疲労と睡眠不足もあったが、準備体操で心身をリフレッシュして九時五十分出発。

スタートして間もなく、稜線から展望する彼方に草原かと思えば、北面はクマザサの原野である。宮崎のスズタケと異なり背丈は低く、白骨化したゴヨウマツ、モミなどの老木とのコントラストは一幅の絵画だ。呼吸も乱れず徐々に登高意欲が湧き上がる。モミ、ムシカリ、ナナカマドの木陰を利用しての小休憩も緑風に心が満たされる。稜線の馬の背を分けて北側は晴れ、南側は雲海の時間差攻撃に、自然の織りなす現象にただ固唾を飲むばかりであった。

夏休み初日とあって、若い登山

宮崎から海を渡り四国の石鎚山へ

平成十三年度海外登山基金助成登山計画募集について

海外登山基金委員会

日本山岳会は登山界の活性化を目指して優れた海外登山計画に対して「海外登山基金」による助成を行っています。一九八八年に実施された三国友好登山隊の成果を基に平成元年（一九八九）に創設されたもので、これまでに選考された三十以上の登山隊に対し、合計二千万円を超える助成を行ってきました。

十三回目となる今回も、困難を求めての挑戦、発想の新しさ、夢多い計画などユニークな登山計画を支援したい、と考えています。

登山といっても、多様なスタイルと発想があります。単に頂上を目指すにとどまらず、新たな課題を発見することも、新世紀の登山にとって大事なことでしょう。

とりわけ来る二〇〇二年は国連が制定した「国際山岳年」に当たります。登山界も、様変わりしつつある山岳とその環境を改めて見すえるとともに、山々が存在する故に息づいてきた山麓の自然体系、民族文化、山岳住民の知恵などを幅広く見直すチャンスではないか、と考えます。

パイオニア精神にあふれる様々なジャンルの挑戦であればぜひ歓迎したい、と考えております。単独、パーティーを問いません。ふるってご応募ください。

記

対象　平成十四年二月一日～十五年一月末に海外の山へ出発する登山隊

申し込み方法　所定の様式（本会事務局にご請求ください）に記入し、登山計画書（十五通）を添えて申請してください。

申し込み締め切り　平成十三年十二月三十一日

審査と助成期間　平成十四年一月中に審査後、二月の日本山岳会理事会で決定し、助成します。なお、対象となった登山隊は後日、登山報告をお願いします。

助成金総額　百六十万円

問い合わせ・申し込み先　日本山岳会事務局　電話〇三-三二六一-四四三三

者に交じり白装束の修験者の集団が追い越してゆく。かつて、女人禁制の宗教色の強かった石鎚で心身を鍛えた修験者の群像が想起される。

■満開のシコクフウロ

あと一息の思いで大鉄鎖場に着く。事前学習の三点確保の実践場として最適だ。全員が足場とホールドする岩場を確認しながら慎重に鎖場を登る。かすかに手が震えている岳友もいる。十二時四十分山頂到着。頬張る弁当の味は格別だ。天狗岳、西ノ冠岳、瓶ヶ森、筒上山などを展望して、よく整備されている登山道を下る。岨路に咲く野草について、松元律子会員の説明に納得する。ちなみに記録された野草は、ハスノハイチゴ、タカネオトギリ、キンバイソウなど二十三種を数えた。また面河本谷をはじめ伊予の国の山脈を堪能しつつ十五時三十分、土小屋登山口に全員元気に到着。車は松山市奥道後「えひめ」に直行、汗を流し、持参の焼酎で夢を結ぶ。翌二十一日は石手寺、子規記念館、松山城などを観光し、二十二時五分宮崎市着。

一方、七月定例山行の日帰り組十四人は、二十二日秘境椎葉の三方岳（一四七九メートル）の大自然林と清流を満喫した。ここに、石鎚山行に同行した岳友の短歌を紹介したい。

（井野　元繁）

霊山を登る（谷口敏子）

六根を清めし人ら思いつつ長き鎖よじのぼりたる

石鎚の深き谷より湧き出づる霧に静もるブナの林は

石鎚山（大谷　優）

青春の記憶のなかに聳えたつ石鎚の峰古希に登れり

先達の身を清めたる石鎚の三の鎖の鉄は冷たし

神々の座のふもとをのんびり歩く
ネパール・ヒマラヤ・トレッキング9日間
関空（大阪）発着チャーター便利用
日本エアシステムの直行便で行く
出発日　①10/29②11/2③11/5④11/9⑤11/16
⑥12/21⑦12/24⑧12/28⑨3/15⑩3/22
国土交通大臣登録旅行業第490号/日本旅行業協会正会員　ボンド保証会員
アルパインツアーサービス株式会社
〒105-0003 東京都港区西新橋1-12-1 西新橋1森ビル2F ☎03-3503-1911
大阪／☎06-6444-3033　名古屋／☎052-581-3211　福岡／☎092-715-1557

東西南北

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。（紙面に限りがありますので、一点につき一〇〇〇字程度でお願いします）

イラスト・宇都木慎一

ヘルマン・ブールのピッケル

薬師　義美

■ナンガ・パルバットとヘルマン・ブール

一九五三年七月三日、ドイツ＝オーストリア登山隊は、宿願のナンガ・パルバット（八一二六メートル）の登頂に成功。インスブルック出身のヘルマン・ブールが午後七時に単独登頂を成し遂げた。これによってブールは一躍、世界の登山界の有名人となり、その自叙伝的登頂記『八千米の上と下』（横川文雄訳、朋文堂、一九五五年）をむさぼり読んだのは、ついこの間のように思えてくる。

しかし、単独であったことから、その登頂を疑問視する向きがなきにしもあらず。ブールはそれをおもんぱかってか、『八千米の上と下』で次のように書く。

「……登頂した証拠に、――というのも、誰も僕が登ったことを見ることはできなかったのだから――またシンボルとして、僕のピッケルに緑の地に白の半月と星のついたパキスタンの旗をつけたまま残してゆくことにする。……」

ブールは頂上にどのようにピッケルを置いたのか、この文章では判然としないが、下山は「……二本のスキー・ストックが唯一の頼りだ。……」としているから、ピッケルを頂上に残したことは間違いない。

ブールはその四年後、一九五七年にマルクス・シュムックを隊長に、カラコルムのブロード・ピーク（八〇五一メートル）に向かった。ほかにメンバーはフィリッツ・ヴィンターシュテーラーとクルト・デイームベルガーで、四人のこのオーストリア隊は、六月九日に全員登頂に成功する。そしてこの後、疲れを知らぬように、マルクスとフィリッツはさらにスキル・ブルム（七三六〇メートル）の初登頂を行う。一方、ヘルマンとクルトはチョゴリザ（七六六八メートル）をめざす。二人は東稜から攻撃したが、天候が悪化したために途中から撤退。その下山中にブールは雪庇を踏み破り、行方不明となる。六月二十七日のことであった。

翌五八年、このチョゴリザを京大隊が初登頂する。その登山中にブールのテントが発見された。テント内はきれいに整理され、寝袋や若干の食糧などが残されていた。寝袋の上には黒い小さなノートが二冊、一冊はブロード・ピークの登頂日記、もう一冊は符号がほとんどのパッキング・リストらしかった。これらブールの遺品は、未亡人の希望により、親友のワルテル・ボナッティにことづけられる。彼は同じとき、ガッシャーブルムⅣ峰のイタリア隊（R・カシン隊長）に参加し、初登頂に成功していた。

■ブールのピッケル発見か！

昨年の二月三日、ドイツはフランクフルト在住の友人、ハンス＝ディーター・グロイルから突然にFAXが入り、そのすぐ後に電話もかかってきた。その概要は、……一月末にベルヒテスガーデン（ドイツ領だがオーストリアのザルツブルクの南南西約二〇キロ）に行き、ブール未亡人に会った。そうしたら、ブールが五三年にナンガの頂上においてきたピッケルを、ある日本のアルピニストが昨年七月に見つけ、持ち帰ったと聞いた。それを返してもらえないものか、と夫人が言っていた。ちょうど、この四月十五日から来年の十一月四日まで、ザルツブルク州がアルテンマルクト（ザルツブルクの南約七〇キロ）で大山岳展覧会『Der Berg ruft, Die Alpinismus Ausstellung』（山は呼ぶ、近代登山の歴史）を開催するので、もし返還してもらえるものなら、それは会場で最も大きな呼び物、目玉になるであろう。その登山家を知っているなら、ぜ

ひ力を貸してほしい。……

さて、一九九九年七月二十八日、ナンガ・パルバットの頂上直下一〇〇㍍のところで見つかったピッケルについては、新聞紙上で見ていたし、九九年十一月の『岳人』（第六二九号）と『山と溪谷』（七七二号）の詳報を読んでいたので、そのピッケルの「アッシェンブレンナー」の刻印やサイズについて知らせてやった。自分も〈STUBAI〉印のアッシェンブレンナーをネパールで入手し、小振りで軽量だったから、ずいぶんと愛用したものである。

折り返し、グロイルから返事がきた。チロルのフルプメスのメーカーに資料を渡したら、ピッケルはブールのものに間違いないだろう、と言ったという。ブールから四十六年、その間に多数の登頂者がすぐそばを歩いていたというのに……、この年は雪が少なく、それで露出したものらしい。そのピッケルを発見し、持ち帰った池田壮彦（たけひこ）氏には面識がないし、住所も知らない。そこで、そのときの日本勤労者山岳連盟登山隊の近藤和美隊長に電話を入れ、仲介の依頼状を書いた。

池田氏（右）から渡されたピッケルを手にするブール夫人

■ザルツブルクへの招待

しばらくして、佐久山の会に所属する池田氏の住所が長野県の軽井沢とわかり、直接に連絡が取れるようになった。そして二月の末に、ブール夫人にピッケルを返してもよい、という快諾を得た。すでに前年の秋、在東京のオーストリア大使館を通じて、返還の希望とその打診があったが、パイプがどこかでつまったか、それ以後、話が途絶えている、とも聞かされる。さっそくグロイルに連絡すると、このことはザルツブルク州政府観光局に伝えられた。

三月十四日、グロイルと私の尽力に感謝するとともに、展覧会の会場で「ピッケル返還式」（Cere-mony of Return）を執り行いたいので、池田夫妻と仲介・立会人として私を展覧会に特別招待したい、と観光局から連絡がきた。返還式は池田氏の都合などで、最終的に四月二十六日となる。三月末までには、正式の招待状も来て、日程もほぼ固まった。また、池田氏の友人で、時事通信社の長谷川勉氏が同行取材することになる。

四月十一日に池田夫妻は一足先に出発。ピッケルはオーストリア大使館から外交特別便でウィーンへ送られた。二十三日には長谷川夫妻と私たちは関西国際空港から出発した。ウィーンまで直行で約十二時間、さらに国内線を乗り継いで一時間、現地時間の夕方六時三十分にザルツブルクに着く。空港にはホテルからの車が迎えに来ていた。

■歓迎夕食会

二十五日は夕方の五時半ごろから、関係者がホテルに集まってきた。長谷川夫妻も合流し、日本側のメンバー六人は一応そろう。先方はオイゲニー・ブール夫人（七十四歳）とその娘さん、ブロード・ピークとチョゴリザの最期までブールと一緒だったクルト・ディームベルガー氏と夫人、ザルツブルク州観光局から局長のマルティン・ウィッツ博士夫妻、担当官のイルマ・ヴァイグルホーファー女史、そしてフランクフルトからグロイル氏、彼とは九年ぶりの再会である。他に時事通信社のウィーン支局長や地元の新聞・テレビの報道関係者も多数やってきた。池田氏とブール夫人はインタビューの対応に大童であった。

そして、八時ころからわれわれ日本側に対する歓迎夕食会となった。ホテルの特設会場でウィッツ夫妻と池田夫妻を中心に、十五人ほどがワインを傾けながら、十時過ぎまで歓談する。

チョゴリザのブールの遺品は、イタリアのボナッティによって届けられたはずだが、そのときの京大隊には私の友人が幾人もいたし、二年前にはボナッティ夫妻が来日し、京都を案内した。そして今回、この池田さんがナンガ・パルバッ

山岳展モニュメントの前で(右端が著者)

トでピッケルを見つけた。こう見ると、ブールさんと日本はたいへん因縁が深く、太いザイルで結ばれているようですね。そう言うと、ブール夫人も娘さんも深くうなずいていた。そして『八千米の上と下』を取り出して、訳者の横川文雄さんがいく度も訪ねてこられたという。その本に池田氏と私がサインを求められたが、四月十三日に横川氏が亡くなったことを帰国後知る。氏は入院中にブールのピッケルをご覧になった、と池田氏から聞いた。

チョゴリザでブールと最期までいっしょだったディームベルガー氏は、ブールのピッケルが帰ってくるなんて、まったく夢のようだ、このような山の友情を目の当たりにして、本当にうれしい限りである、と目を輝かせて言う。二カ月後には、自著の日本語訳『K2、嵐の夏』が山と溪谷社から出るので、川崎社長と日本の読者に心からの挨拶を送りたい、とも言った。彼の著作の邦訳は初めてである。

ウィッツ局長とは、エヴェレスト山麓のクンブ地域の経済技術援助、ミニ水力発電の建設に話が弾んだ。局長はオーストリアのそのプロジェクトに参加したと言い、私は数年前にナムチェ・バザールで煌々と輝く電灯を見て、大いに感嘆したことを言った。

■ピッケル返還式

二十六日は心地よい快晴となった。気温九度、迎えの車で九時四十五分に出発。南のアルテンマルクトの町に向かう。ホテルから約一時間で山岳展覧会場に着いた。

十一時半過ぎ、「返還式」がはじまった。最初にウィッツ観光局長が挨拶し、返還に至る経緯を紹介する。ついで池田氏が自分たちのナンガ・パルバット登山の概要と、ピッケルを発見したときの様子を話した。ドイツ語の通訳はザルツブルク在住でツアー会社に勤め、車での送迎をしてくれている日本人のY・Kさん。

この後、大勢の観客が見守るなか、東京から送られてきていた荷物の梱包が解かれ、大きな拍手を受けながら、池田氏からブール夫人にピッケルが手渡された。私も初めて目にするブールのピッケル。そばではブロード・ピークでのもう一人の仲間、フィリッツ・ヴィンターシュテーラー氏も感慨深げに見つめていた。

手持ち無沙汰になった池田氏には、かわってシュトゥバイのアシエンブレンナー、木製シャフトの新品ピッケルが、出席していた同社のペーター・ミューラー氏から贈られた。同時に、長谷川氏と私も一本ずついただいた。

■大山岳展覧会

山に関する神話や民話、妖怪や雪男にはじまり、アルプスやヒマラヤの登山の概説的な歴史、それを写真や資料（本と日記類）を用いて説明してある。登山用具の発展についても、歴史的なものが展示してある。古い登山靴、ピッケル、テント、ルックザック、酸素ボンベなどもあった。中央部にはヒマラヤ八千㍍峰の大きな写真パネルが並び、初登頂の記録とオーストリア隊による登頂の解説がつく。マナスルのパネルには「Toshio Imanisi」の名前はあったが、残念ながら、ポートレートはなかった。世界の女性登山家のコーナーには写真つきの「Junnko Tabei」はあった。

ネパールのものでは、低地の民家や竹製の橋が作られており、売店コーナーには、ナムチェ出身のシェルパーニのチャン・ショップもある。ウィッツ局長は試飲してみなさい、とみんなに勧めていた。真鍮製のボールにつがれたチャンは甘酸っぱくて美味しく、本場のものに近かった。

ほかに、山岳遭難救助用の装備と現場の再現、六㍍ほどの高さの人口壁もある。私の目の前で一人の少女が果敢に挑んでいた。クルト・ディームベルガー氏は、これがカラコルムやヒマラヤで使って

きた16ミリ映画撮影機だと、ベル&ハウエルやアリフレックスなどを指し示したが、別のコーナーへ連れて行って、これが自分の指先だと教えてくれた。握手したとき、右手指が何本か欠けていることに気づいていたが、K2での凍傷で切断した指先を、小さな容器にホルマリン漬けにしてある。それを指差しながら、いたずらっぽく笑う。

クルト氏のコーナーの近くにブールのブースがある。ナンガから帰ったピッケルは、そこに用意される特製展示ケースに収め、近日中に公開される予定だという。

駆け足でまわり、なお時間不足ではあったが、四時二十分に会場を後にした。入場料は大人一六〇シリング（当時で約千四百円）、八～十八歳はその半額。夏季は月曜日～日曜日の午前十時から午後六時、ザルツブルク市内から車で一時間半ほど、二〇〇一年十一月四日まで開催している。

ホテルに戻ったのは五時半、グロイルはあわただしくフランクフルトに帰っていった。私はこのあと、フシュル湖を含む、ザルツカンマーグートの湖水地帯を巡り、ウィーンに戻った。そこではヴォルフラム・マンツェンライター氏に会う。彼は京都大学の人文科学研究所に留学して、日本の近代登山と登山思潮を研究し、それを論文にまとめて博士号を得た、ウィーン大学の日本通である。東京へも調査に出向いていたから、ご存知の方もあろう。ウィーンで会ったもう一人は、ラインハルト・フルトナー博士。高校の化学の先生で、ヒマラヤの文献目録では多くの情報をもらい、たいへん世話になっていた。

■おわりに

帰国して新聞を調べたら、朝日新聞の四月二十六日付夕刊に「フシュル（オーストリア）＝時事」として、長谷川氏が送っていた記事が、ブール夫人と池田氏が並んで写るカラー写真つきで掲載されていた。

われわれが帰国したあとに展覧会のカタログが刊行された。タイトルは展覧会の名称と同じで『Der Berg ruft!』一九×二八チセンの横長で、一七六ページの立派なもの。その二一ページに池田氏とブール夫人がピッケルを持って並ぶ写真があり、本会の図書室にもこのカタログは入っている。

なお、本稿は京都支部の『支部だより』第五九号（二〇〇〇年六月十五日）に掲載したものをアレンジした。

残雪のグラン・サンベルナール

村井　葵

「二十四年ぶりの大雪だったので僕が案内しましょう」と言って、地元オルシェのジュリアンがガイド役を買って出てくれた。見るからに頑強な頼もしい三十一歳の青年である。

ローヌ川沿いのマルチニーから四五キロの「ルート・ナポレオン（一七九六年進軍）」を登りつめた二五〇〇メートルのグラン・サンベルナール峠で僕らは山支度をした。同行のIとTはともにJAC会員でもある。

七月三日、快晴であった。峠は五月の連休の北アルプスほどの残雪で埋まっていた。聖ベルナール（一〇九〇～一一五三年）がホスピスを開いて以来、現在も整然と活動している。SAINT-BER

新ハイキング選書

◀第4巻▶ 改定第2版 **一等三角点のすべて**
多摩雪雄 編　B6判・350頁・定価1995円(税込)
都道府県別に一等三角点を地図上に明示。一等三角点の詳細な解説、一等三角点研究の決定版。

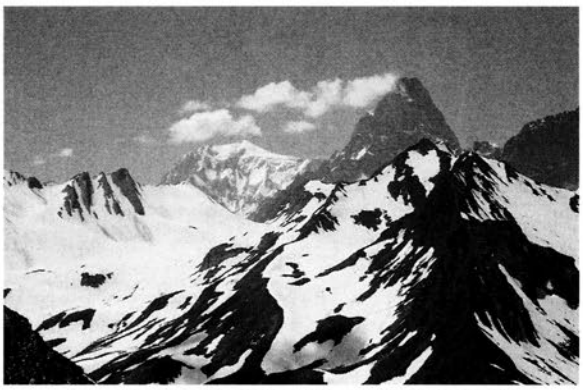
◀第9巻▶ 第3刷 **一等三角点の名山100**
B6判・336頁・定価1632円(税込)
100山すべてコース図と写真入りで実用性が高い。

◀第18巻▶ 改定第2版 **一等三角点の名山と秘境**
A5判・340頁・定価1837円(税込)
全国一等三角点の地方別の配置図と全国の一等三角点の総覧が付いている。一等の山100座を紹介。地図が大きく見易い。

◀第20巻▶ **一等三角点の山々**
A5判・310頁・定価1680円(税込)
一等三角点の山シリーズ。280山の総索引と高度順一等三角点100座が付いている。80座を紹介。

第9巻、第18巻、第20巻のガイドの山は重複しません。

新ハイキングの見本誌はハガキで申し込めば無料で送付します。
新ハイキング社　〒114-0023 東京都北区滝野川7-6-13 電話・FAX 03(3915)8110


モンブラン（左奥）とグランドジョラスの眺望を楽しむ

NARDはフランス語ではサンベルナールだが、英語読みではセント・バーナードで、有名なセント・バーナード犬の発祥の地でもある。山岳救助犬として活躍し、今も十五～十六頭の大型犬が手厚く飼育されている。産まれたばかりの子犬が二匹いた。

つづら折りに降りていくアオスタの谷を背に、イタリア側の深い雪の斜面をラッセルして登る。ところどころインゼル状の草付きを渡り、雪渓の傾斜が増してきたころ二八〇〇㍍のコルに出る。国境稜線である。僕ら以外に一人の登山者もいない。ジュリアンが言ったように、なるほど、夏道は深い雪に埋没していて静寂さを満喫できた。

長大な雪の斜面のグリセードを楽しみながら、左寄りにフェレの谷目指して下っていった。呼吸を整えるために立ち止まって左に目をやると、西方二五㌔の紺碧の空間に白一色のモンブランが陽光に照り輝いている。頂に立った日のことが思い出された。

さらにその手前に黒光りしたグランド・ジョラスのプロフィールが立ちはだかっている。ドリュの特徴ある丸い岩峰も確認できた。実はこの方角から秀麗な姿を自分の目で確かめるためにやってきたのだ。幸運のひとときを神に感謝しつつ僕は立ち竦んでいた。グランド・ジョラスに挑んだ日本人を一人ひとり思い浮かべていた。そのほとんどのクライマーが成功したあと、壮絶な遭難死を遂げていることを知り愕然とした。

蓮状の氷の華が浮く氷河湖にさしかかった。雪渓は急角度に湖に流れ落ち、滑り降りてゆくと「ドボン」というデンジャラス・ゾーンであった。ジュリアンが適切にルートを指示してくれた。

雪が消えると舞台は緑のアルプのお花畑に変わった。百五十種の高嶺の花という。百花繚乱の天園である。アルペンローゼ、エンチアン、エーデルワイス、キンポウゲ、リンドウ、キンバイ、アクマノツメ、ウサギギク、アネモネなど、この時期は色とりどりの花が見事だと聞いてはいたが、まさにパラダイスではないか。息をきらせてやってきた者のみにこの恵みは付与される。神は粋な計らいをするものだと思った。

フェレの谷はツール・デュ・モンブラン（七日間）のスイス領のルートになっている。イタリアのクールマイユールから二五三七㍍の峠を越えてフェレの谷に入り、オルシェの手前のプラ・デ・フォルトからシャンペ湖に登り、フランスのトリアンに抜けるのである。

山を下りてフーリーのキャンプ場で、一九六三年夏、アイガーヴァンドのソロ初登の偉業を成し遂げた老クライマー、ミシェル・ダルベレイと歓談できたことは極めて幸運なことであった。フェレ谷のラ・フーリーはツール・ノアールから続く針峰群のエギュ・レンジが連なり、その鋭い稜線が国境になっている。険悪そのものの懸垂氷河が頭上に引っかかっている。稜線を越えればアルジャンチェール氷河が流れているはずだ。針峰群の南に位置する三八二〇㍍のモンドランの絶頂はイタリア、スイス、フランス三国の分岐点でもある。頂上に立てばシャモニは指呼の距離のはずだ。

今夏のグラン・サンベルナール行は予想以上の収穫に満たされた山旅であった。

二〇〇〇㍍以上の山全山登頂

南川　金一

白馬鑓西方の中背山を最後に、二〇〇〇～二一〇〇㍍の百四十山を登り終えた。これで国内の二〇〇〇㍍以上の山六百四十山全山を登り終えたことになる。一九九〇年に二五〇〇㍍以上の山を登り終えてから十一年かかった。

山の数を数えるというのは必ずしも単純な作業ではない。国土地理院は五万図または二・五万図において、山名は太字の聳肩体（右

肩上がり斜体）文字で、地点名は一・五ミリ角の明朝正体の文字で表記している。したがって、山の数は聳肩体で表記されている山を数えればそれでよいともいえる。しかし、地図上には山名注記のない山がたくさんあるし、一・五ミリ角の明朝正体で表記されている小ピークについても、人によって山と見なす場合と見なさない場合があるから、これらの取捨選択にはかなり主観が伴う。

筆者の考え方では、五万図あるいは二・五万図に山名注記のある六〇一山、および山名注記はなくても山に登る立場から大事だと思われるもの三十九、計六百四十山となった。前者については、五万図なり二・五万図を広げた際に山名が載っている二〇〇〇メートル以上の山はすべて登ったということであり、後者について幾つかを上げれば、北アルプスでは劔北方稜線の白萩山、大猫山、南アルプスでは悪沢岳北方の西小石岳、青薙山南西のロボット（静岡支部では無岳山と命名）、最南端の二〇〇〇メートル峰バラ谷の頭（二〇一〇メートル）などである。中央アルプスでは三ノ沢岳南西の二三三八・七メートル三角点ピーク、およびその南の蕎麦粒山をそれぞれ一つの山と見た。もう一つ例をあげれば、長野県奈川村と開田村の村界尾根上に二〇三三・二メートルの三角点ピークがある。境峠と月夜沢峠の間の最高点であり、立派な山である。寄合渡で聞いても、この山には特に地元で呼んでいる名前はなく、もちろん登山にくる者はいないということであったが、地勢的には無視することのできないピークだと考えた。

二〇〇〇メートル以上の六百四十山のうち、登山道のない山が二百くらいあるであろうか。それらの山についての最も詳しい情報源は二・五万図である。二・五万図が唯一の情報源であるような山が、この日本にもまだいくらでもあるというのはうれしいことである。二・五万図によりルートを決め、交通手段に応じて作戦（登るべき時期、テントを張るべき場所など）も自分で決め、登るのももちろん自分であるから、登り得た時の達成感は実に大きい。こうした登り方こそが山登りの原点であろう。

その多くは藪に覆われているが、高温多雨という日本の自然条件下ではそれは当然のことであり、藪を避けては日本の山には登れない。藪への対処策を考えながら登るのが、日本の山の登り方だと思う。

そうした山登りを重ねてみて、筆者が何よりうれしく思うのは、本会の草創期の人たちが活躍した探検期の日本の山の雰囲気を体験できたこと、そしてそれらの人たちが山に寄せた思いを共有することができたことである。今日、小島烏水、田部重治、木暮理太郎といった大先達が初期の『山岳』に書いた紀行を読むとき、われわれは、山の古きよき時代に羨望の思いを抱くとともに、当時のような山はもはや日本には存在しないと思い込んでいるのではないだろうか。筆者はそうは思わない。当時そのままではないにしても、あるいは人跡未踏ではないにしても、百年前と変わらないような山は少なくないといえる。

つい先日も、古い『山岳』を読んでいて興味深い文章が目にとまった。それは、大正七年に木暮理太郎氏が武田久吉氏とともに、早川尾根から広河原に下り、北岳、間ノ岳に登り、塩見岳から仙丈岳に至った時の通信で、熊の平から「黒檜山に到り見んとの野心ありしも、林莽の獰猛甚だしきに辟易して…」仙丈に向かった、とある。黒檜山は南アルプスの主脈から外れているために今も訪れる者はめったになく、おそらくは明治・大正期のそのままの姿を保っているのではないかと思われる。筆者がこの山に登ったのは三峰川からなので、〝獰猛〟の程度の比較はできないが、ルートとして採った黒檜谷と熊沢の間の尾根には人間が通ったことを示す痕跡は皆無であった。この文章を読んで、大先達も人の子だったのだと楽しく思うとともに

山旅総合カタログご請求下さい(無料)

キリマンジャロ(5892m)登頂とサファリ　11日間

出発日：12/3、12/24、2002/2/8
料　金：545,000円より（成田発）
航空会社：KLMオランダ航空　リーダー：日本より同行します

確実に登頂していただく為に高度順応日を設け、ゆっくりと歩きます。アムステルダム経由でキリマンジャロ空港へ直行するのでコンパクトな日程です。

アミューズトラベル株式会社

〒160-0023 東京都新宿区西新宿 1-22-2 新宿サンエービルB1
☎03(5325)1256　FAX03(5325)1258
大阪 06(6456)3366　名古屋 052(588)5617
広島 082(502)2525　福岡 092(414)5566

に、時代は隔たっていても、このような山に登ろうとする思いを共有し得たことをうれしく思う。

南アルプス白峰南嶺の別当代山は東西に長い稜線上のピークで、その南面に高原状の平坦地がある。森林の中ながら下草があり、ケモノによるものか、かつての峠道の名残か、一条のかすかな踏み跡が認められた。この峠道こそ明治三十九年に荻野音松が甲州から駿河へと越えたルートで、『山岳』第一年第三号に載った彼の「駿州田代山奥横断記」は登山史に大きな意義を持つものである。『山岳』第三年第三号は、小島烏水が「君の死は我が山岳会の一大損失である」と夭折した荻野を悼み、黒飛白の単衣、着真蓙、麦藁帽子という彼のスタイルの写真を載せている。筆者の脳裏には、別当代山南面の峠道の風景に彼の着莫蓙姿が重なり、百年近くも前の山の世界へと誘われた。

「二三〇〇㍍級の山」（本誌六二六号）に書いたように、北アルプス清水岳北方の猫又山には、七十年前に塚本繁松氏が書いた（『山岳』第二六年第三号「黒薙川柳又谷」）とおりの花の群落と熊の多い自然がそのままに残っていた。

もう一つ、最後に登った中背山について書いてみたい。祖母谷温泉から中背山を経て白馬鑓に至る中背尾根には、戦前は登山道があり、一九三九年以前の「山日記」のルート図にはミシン線が入っている。戦中の荒廃を経て、戦後はあまり使われず、廃道と化してからすでに半世紀近いという。一九九五年の集中豪雨により、この尾根の一八〇〇㍍辺りの南東斜面に大崩壊が発生して中ノ谷が堰き止められ、その現場を確認するために再度道が開かれた。その道は現在もかなりはっきりしており、それをたどれば一六五〇㍍辺りまでは問題なく行くことができる。しかしその先の高度差にして四〇〇㍍ほどは完全に藪に埋まっており、かつて山道があったことを示す痕跡すら見当たらなかった。この稜線の探検期の姿もこうであったのかとの感慨を抱きながら頂上に立った。

もとより、今日の山登りは当時に比べればはるかに容易である。探検期にはロクに地図もなかったから、その山域に明るい案内者を頼んだ。今日では交通手段が発達し、二・五万図というこの上ない武器があり、便利な道具・食料・テント・そしてペットボトルという極めて軽便な水の運搬容器があって、単独であっても不可能な山はない。先人のパイオニアワークに比べれば、ただの道楽に過ぎないが、二〇〇〇㍍以上の山を全山登るという行為を通じて、探検期の山登りの一端を、あるいは当時の山の雰囲気を体験することができたのは幸せであった。

Sanken Life

山研に吹く風！

管理人　木村太郎・弥生

上高地の夏は想像以上に短いものです。朝晩ストーブをつけないですむ時期は、7月中旬から8月いっぱい。日中半袖姿でいられる日は数えるほどです。標高が高いため日中の日差しは強烈ですが、ちょっと木陰に入ればヒンヤリした空気に包まれます。山研内も陽はあまり差し込まないため、一日中爽やかな状態で、朝晩は肌寒いくらいです。

しかし、夏の繁忙期は外に出る機会のほとんどない私たちには、この「短い夏」もなかなか満喫することができません。そこで去年、せめてトロピカル？な雰囲気に浸れるようにとウクレレを購入し、練習をはじめました。でもやはり忙しくて、結局、春と秋ストーブの傍らで、長袖シャツを着てハワイアンミュージックを奏でるといった状態になってしまいました。それでも寒々とした山研内にハワイの風がほんの少しだけ吹きました。

今年は残念ながらまだ一度もトロピカルな風は吹いていません。練習不足でウクレレを手にしたところで吹く風は怪しい風になりそうです。果たして山研閉所で下山するまでに、過ぎ去った夏を取り戻すくらいのいい風が吹いてくれるでしょうか……。

●宿泊予約、その他利用に関する問合せは直接山研管理人へ。
Tel：0263－95－2533
Fax：0263－95－2635

図書紹介

イラスト　蜂谷益雄

菊地俊朗・著『山の社会学』

昨今の国内登山を取り巻く諸々の社会事象を、登山者の視点から報告、論評している。「山小屋について」「百名山登山―深田百名山の光と影」「登山者層―なぜ高齢化か」などなど。

著者は長野岳連のギャチュンカン遠征に参加し、その後も、四十年間継続して国内の山に熱心に登っている本会会員である。

もともとジャーナリストである著者の「社会部記者の目」で登山の社会現象をとらえているところが本書の特長といえる。山小屋の経営と登山道整備の関係、し尿処理取り組みの問題点など、取材の成果が詳しくリポートされている。これから国内登山に打ち込もうとする人は、読んでおいたほうがよいだろう。正確で、偏りのない情報が網羅されているからだ。

（松沢　節夫）

二〇〇一年六月　文藝春秋発行（文春新書）二五二ページ　七百十円

飯田年穂・著『問いかける山』

久しぶりに骨組のしっかりした山の本を味わった。著者はＩＣＵから東大大学院を経て、フランス語とフランスを中心とする文化・思想を専攻する明治大学教授。山は遅咲きで、若いときは高所恐怖症だったといい、大学から派遣されてグルノーブル大学に研究留学したのが山に狂うきっかけらしい。「若い頃の経験がなく、年齢的に衰えがはっきりしてから始めた」というが、どうしてどうして、なかなかの腕前で、フランスのガイドと組んで四級、五級から六級クラスの岩までこなしている。既に戦前、レイモン・ランベールとエギーユ・ヴェルトを登っている菅原三郎氏が岳父だというから、山との接点はあったわけだ。

本書が面白いのは、単なる山登りの話ではなく、古代ギリシャから現代までの広範な西欧思想に裏打ちされていることで、子連れ留学だから、教育論あり家族論ありで、話は山から遠く離れる一方、と思えばきちんとまた山に戻ってくるという語り口のよさ。それを支えているのは、フランス思想を身につけた良識である。山を語って文化を語れる見本であり、「問いかける山」に答えながら、逆に山に問いかけて答えをもらうという味な世界が構築されている。書名は含むところが豊かで秀逸。書店で見かけないのが残念。

（大森　久雄）

二〇〇一年七月　木魂社刊　三〇二ページ　二千円

ＣＪ編集部・編著 改訂『日本の岩場』（上・下巻）

『日本の岩場』がリニューアルされて帰ってきた。危険度や、支点についての新しい評価基準を設けているため、アプローチも含めたルート全体について親切な解説となっている。また、甲斐駒や屏風、錫杖、丸東それに宮崎の岩場の新ルートが収録されたことで、岩雪やＣＪのバックナンバーを探す手間は大幅に省かれることになる。

ただ、いわゆる「アメリカンエイド（ＡＡ）」、ロングフリー、ボルトラダーに共通して、五級、六級といったような従来のグレーディングを踏襲しているため、それぞれの分野に特化したクライマーにとっては、もはやルートグレードは意味をなさないのかもしれない。ＡＡのルートグレードは特に一ランク甘めという気もする。所要時間による単純な評価基準にしたほうがかえってわかりやすいのかもしれない。

ただ、どういうグレーディングであれ、選ぶのは自分であり、また、どのグレーディングであれ、登ればつぶしが効くのは変わらない。それがわかっていれば、アルパイン系のクライマーの数が少なくなっているといわれる昨今、意欲あるルーキーたちにとっては、格好の目標として、さらなる飛躍を目指すクライマーにとってもわかりやすいガイドとなるかもしれない。

（宗像　充）

二〇〇一年七月　白山書房発行　上巻二七八ページ　下巻二五〇ページ　各千九百円

会務報告

七月理事会

日時　七月十一日㈬　十八時三十分～二十時四十五分

場所　日本山岳会会議室

［出席者］　大塚会長、長尾、芳賀、村井各副会長、西村、今村、坂井、高原、朴元、高遠、宮下、鈴木、黒川、大野、中村、藤本、篠崎（河西代理）、鳥居、小川各理事、内田、古市各監事、平林、宮崎、宇田川、鯵坂各常任評議員

［委任］　松原理事

【審議事項】

一、会印規定の制定（西村）

四月理事会で監事より指摘のあった「会長印の適正管理」を受け、「会印規定」を制定したい。本規定は本日から実施する。　承認

二、百周年記念事業企画プロジェクトについて（西村、平林）

以下の内容で進めたい。①メンバー＝平林常任評議員（リーダー）、村井副会長、西村、今村、高原各理事。②企画内容＝現在進行中の企画（百年史、新日本山岳誌、白神山地ブナ林造成）に加えて全体の事業企画（コンセプト）、第一次収支予算（概算）と日程の立案。③検討、承認の機関＝理事会。必要な場合は評議員会、支部長会議に意見を求める。④スケジュール立案＝七月～十二月、最終案討議＝十二月定例理事会。⑤指針として〈a〉百周年の伝統をいかに取り入れるか〈b〉将来に残すもの〈c〉全員参加をモットーに。　承認

三、明治大学ローツェ・アンナプルナ一峰登山隊推薦状交付（西村）

明治大学山岳部炉辺会より標記登山隊（実施時期は二〇〇二年秋）に対し推薦状交付申請。　承認

四、「JAC NEWS LETTER」（仮称）の発行（中村）

海外委員会は日本人の活動でパイオニア的遠征、初登頂および記録に値する登攀・冒険、科学的フィールド・ワークのレター（英文）を年二回発行し、海外関係団体などに発送したい。取り上げる対象は当会員の活動記録に限定しない。第一号は十月に発行予定。　承認

五、平成十三、十四年度海外登山基金委員会の委員選任（坂井）

委員長＝村井副会長（留任）

委員＝西村、坂井各理事、江本嘉伸、熊崎和宏、大蔵喜福（以上留任）伊丹紹泰、古野淳、谷川太郎（以上新任）

事務局＝高所登山研究委員会

第一回会合を七月二十三日に開催し、会報九月号に募集要項を掲載する予定。　承認

【報告事項】

一、外務省アジア太平洋局からの協力要請（西村）

二〇〇二年はインド、パキスタン、スリランカと国交樹立五十周年、バングラディシュとは三十周年にあたる。ついては周年行事を計画中であり、協力検討依頼があった。当会とのかかわりもあることから、協力を検討する旨の回答をした。

二、第一四半期監査（古市、内田）

七月六日、帳簿、関係書類の監査を行った結果正確妥当であった。

三、名義後援許可願い（西村）

「今西錦司生誕百年記念シンポジウム（十月六日開催）」発起人代表斎藤惇生氏より依頼があり、許可。

四、各委員会報告

総務委員会・西村

①会員名簿二〇〇一年度版発行につき広告掲載業者へ協力の呼びかけを別紙要領で行うよう依頼。

②委員会・同好会連絡会議を七月四日当会会議室で実施。ルーム使用方法の確認、意見交換を行う。「同期会」で発展的に解散するところ、また名称を「つくも会」として門戸を広げた同好会とするなど変化が見られた。

財務委員会・村井副会長

六月度の会計報告。会費収入は七八％の納入率で順調。

図書管理小委員会・村井副会長

茨城県の鷲晴男氏（非会員）より洋書四十九冊、洋雑誌（ナショナル・ジオグラフィック）約三百冊の寄贈を受けた。

集会委員会・朴元

「白神山の紅葉とキノコ山行（案内人＝根深誠氏）」を十月五～八日まで行う。募集人員四十名。チャーターバス利用。

会報編集委員会・今村

七月号は「平成十三年度通常総会」特集。

資料委員会・鈴木

七月七日、松本市において二〇〇一年世界岳都都市会議開催記念歓迎レセプションが開催され、大塚会長、鈴木が出席。

遭難対策委員会・黒川

七月五、六日、全国遭難対策協議会が開催された。

科学委員会・藤本

六月十六、十七日、探索山行「奥会津に高層湿原とブナ林を訪ねる」を駒止湿原、志津倉山で行った。参加者は四十二名。

自然保護委員会・篠崎

①七月二日付で、岩手県教育委員会教育委員長宛「早池峰における山岳競技について（再度の質問とお願い）」（別紙資料）と題し、早池峰山で競技することのないよう求める書面を自然保護委員会名で提出。

●西村常務理事より「本件は今後さらに新たな方策をとる場合には理事会に相談してほしい」との意見があった。

②自然保護全国集会を関西支部の協力で十月六、七日、大台ケ原で開催する。

その他

①千葉県立中央博物館で「ヒマラヤ――人・自然・文化」展開催中（九月九日まで）

②当会における「環境保全、ゴミ問題」に関する見解につき、さまざまな意見が交わされた。

■会員異動

物故

飯野俊介（一一三九四）01・6・15
榎並祐史（一三一五二）01・7・17

退会

山崎　健（八一六〇）
入谷浩右（八五一六）
島田英一（九二二三）
木村京子（一一四二四）
渡部忠三（一一四三九）

図書受入報告（2001年7月）

著　者	書　　名	ページ・大きさ	出版元	出版年	寄贈／購入別
小泉武栄	登山の誕生：人はなぜ山に登るようになったのか（中公新書）	224pp/18cm	中央公論新社	2001	出版社寄贈
木村修　他（編）	ヒマラヤ：人・自然・文化（平成13年度特別展解説書）	108pp/30cm	千葉県立中央博物館	2001	吉永英明氏寄贈
米倉伸之　他（編）	日本の地形Ⅰ：総説	349pp/27cm	東京大学出版会	2001	出版社寄贈
渋沢登喜子	劔岳	103pp/20cm	渋沢登喜子（私家版）	1988	名越礼子氏寄贈
渋沢登喜子	遥かな國遠い昔：遺稿	208pp/20cm	創栄出版	1994	名越礼子氏寄贈
堀江精三郎（編）	ゆうかり：横浜友雁会創立40周年記念誌	127pp/26cm	横浜友雁会	2001	発行者寄贈
日本雪氷学会（編）	3.27左俣谷雪崩災害調査報告書：日本最大の雪崩はいかにして起こったか	68pp/30cm	日本雪氷学会	2001	発行者寄贈
ｻﾝﾌｫｰﾄﾞ（著）芳賀孝郎（監修）	この山に呼ばれて：Called by this Mountain（英和2ヶ国語版）	111pp/27cm	カナダ山岳会	2001	発行者寄贈
山尾三省	森羅万象の中へ：その断片の自覚として	261pp/19cm	山と溪谷社	2001	出版社寄贈
石川直樹	この地球を受け継ぐ者へ：人力地球縦断プロジェクトP2Pの全記録	458pp/20cm	講談社	2001	著者寄贈
C.J.編集部（編）	日本の岩場（上巻）	278pp/19cm	白山書房	2001	出版社寄贈
C.J.編集部（編）	日本の岩場（下巻）	250pp/19cm	白山書房	2001	出版社寄贈
飯田年穂	問いかける山：登ることと考えること	302pp/20cm	木魂社	2001	出版社寄贈
T.Watanabe.（eds.）	Proceedings of the Intenational Symposium on the Himalayan Environments（24-26Nov.2000,Kathmandu）	277pp/30cm	HokkaidoUniv.	2001	発行者寄贈

INFORMATION

イラスト・宇都木慎一

◆白神山の紅葉ときのこ山行

集会委員会

八月号でお知らせした「きのこ山行」の詳細です。青森支部の皆さま、根深誠会員の協力で、秋の白神山をお楽しみいただきます。

日程　十月五(金)～八日(月)

六日　八森→青秋林道秋田側終点より二ツ森登山→十二湖散策→森山荘泊

七日　弘西林道終点→天狗岳往復→黒熊の滝→熊の湯温泉泊

八日　帰京

集合　五日(金)二十二時　新宿駅西口　スバルビル前（夜行チャーターバスで出発）

費用　四万五千円（往復交通費込）

申込　九月二十九日（厳守）までに氏名、会員番号、住所、TEL＆fax を明記し勝山康雄宛（〒三三四－〇〇五七　川口市安行原一一六二－三五　TEL＆fax〇四八－二九四－九六四六）

定員　四十名

＊締切日と開催日までの日程が近いため、急いでお申し込みください。計画詳細を郵送後、電話かファックスで確認の連絡をします。

◆講演会「道に学ぶ」科学委員会

今も残る古道について、その成り立ちや現状を通して、周辺の山岳文化を学びます。

日時　十月十八日(木)十八時三十分～二十時

会場　日本山岳会集会室

講師　中西章会員

問合せ　丸山修一まで（TEL〇三－五二一一二－七〇三五）

Eメール　kagaku@jac.or.jp

◆紅葉の上高地と焼岳登山

山研運営委員会

紅葉の上高地を訪ねて焼岳登山を楽しみ、実用段階に入ったミニ水力発電を体験します。

日程　十月十三(土)～十四日(日)

費用　一万円（宿泊、食事二食分）

定員　先着順、二十名

申込・問合せ　野崎和彦宛（〒一一三－〇〇二二　文京区千駄木四－四－一八　TEL〇三－三八二一－〇八二五＝自宅　〇三－五六八七－二八二〇＝勤務先　〇九〇－二六五一－三六二八＝携帯）

◆二〇〇一年自然保護全国集会

自然保護委員会

日程　十月六(土)～七日(日)

六日　九時大和上市駅前集合　大台ケ原研修

七日　集会「大台ケ原に学ぶ」十三時解散

会場　村営「ホテル杉の湯」

費用　一万五千円

申込　川越尚子宛（〒一八五－〇〇一一　国分寺市本多三－七－三一）ハガキで。

◆第七回伊吹山播隆祭　東海支部

大垣市の北、神戸町で播隆上人の大字名号碑が見つかった。建立は文政十二年。神戸町より十数キロ北に上人が開基した一心寺がある。寺の口伝によれば近隣の七ヶ村を巡って念仏回向をしたという。では残る四ヶ村と名号碑は？

日程　十一月十(土)～十一日(日)

十日　播隆上人シンポジウム・十三時　森の資料館　伊吹薬草湯　同セントラルハウス（宿泊）

十一日　貝月山（一二三・四メートル）登山　往復四時間　トチの大木群

場所　岐阜県春日村長者の里

費用　一万円

問合せ　東海支部・稲葉省吾宛（〒五〇三－二三一四　岐阜県安八郡神戸町落合一二四　TEL＆fax〇五八四－二七－七二四七）

◆第十四回懇親山行　92同期会

紅葉に身を染め、静かな山のたたずまいを存分に味わいませんか。

日程　十月十九(金)～二十一日(日)

場所　新潟県・火打山

宿泊　妙高高原・笹ヶ峰ヒュッテ

十九、二十日連泊予定

集合　JR信越線妙高高原駅　十九日十時三十四分

申込　十月十日までに召田俊雄宛（TEL〇四八－七七二－八三四三）

◆第七回山行　田代山・帝釈山

98同期会

日時　十月二十日(土)　前夜発

集合　十九日(金)二十二時三十分新宿駅西口　富士銀行前

行程　チャーターバス利用　檜枝岐＝林道→帝釈山→田代山→湯の花温泉（一浴）

歩程四～五時間

費用　約一万円

申込　十月五日までに会員番号を記入しfaxまたはハガキで海老沼清宛（〒三三二－〇〇二一　川口市西川口一－二七－一四　fax〇

四八－二五五－〇一六六）

＊申込者には詳細を送ります。

◆尾瀬の秋、ご一緒にいかが

00同期会

同期会結成二回目の山行、武田久吉メモリアルホール訪問と、長蔵小屋三代目・平野紀子氏の自然保護と山小屋運営についての講話を予定。同期以外の方も大歓迎。

日程　十月二十㈯～二十一日㈰

宿泊　尾瀬沼・長蔵小屋

費用　一万二千円（一泊三食他）

交通費は各自負担

申込　九月三十日までに三渡忠臣宛（〒一九三－〇九三二　八王子市緑町七四五－一　TEL＆fax〇四二六－二五－〇五五一）

＊同期以外の方には詳細を送付。

◆第十八回定例山行・守屋山

つくも会（99同期会）

晴天特異日を狙って山歩きを計画しました。JAC会員の参加をお待ちしています。

日程　十一月三日㈯

場所　守屋山東峰～西峰往復（ハイキングコース約三時間）

集合　①JR新宿駅五番ホーム七時

②JR茅野駅改札口　十時

③守屋山登山口駐車場　十時三十分

申込　十月二十三日までにハガキかEメールで。会員番号、氏名、連絡先、希望集合場所を明記し、渡辺泰則宛（〒一七七－〇〇三三　練馬区高野台五－二－一四　Eメール　yasunabe@jcom.home.ne.jp）

◆秋の山行案内　ジャック93会

塩田平の静かな温泉に泊まり、紅葉の信州の山々を歩きます。

日程　十一月十㈯～十一日㈰（一泊二日）

十日　独鈷山（とっこさん）（一二六六㍍）歩行四時間半

十一日　檀嶺岳（ごまゆみだけ）（一二二三㍍）歩行三時間

宿泊　田沢温泉「ますや旅館」（長野県小県郡青木村）

集合　十日十時　下之郷駅（JR上田駅より上田交通別所線）交通費は各自負担

費用　一万二千円（宿泊代込）

申込　十月二十日必着、ハガキに会員番号、住所、氏名、電話を明記し花澤廣巳宛（〒一五七－〇〇七二　世田谷区祖師谷一－一七－八　TEL＆fax〇三－三四八三－〇九二七）　金井善男（〒三八六－〇五〇八　長野県小県郡武石村下武石一〇〇八　TEL＆fax〇二六八－八五－二七七五）

◆会員名簿を改定します

総務委員会・名簿作成委員

二〇〇一年度の会員名簿を作成します。記載事項（住所、電話、所属支部）に変更のある方は事務局までご連絡ください。変更受付は十月一日までとします。新入会員で届出の住所、電話などが変更している方も事務局へご連絡を。

ルーム日誌

7月

2日　総務委員会　92同期会

3日　会報編集委員会　アルパインスケッチクラブ

4日　総務委員会　資料委員会

5日　学生部　アルパインフォトクラブ　新日本山岳誌編集委員会

6日　財務委員会　山岳編集委員会　アルパインスキークラブ

9日　フィルムビデオ委員会　山げらの会

10日　常務理事会　二火会　アルパインスケッチクラブ

11日　理事会　つくも会　ジャック93会

12日　学生部　山の自然学研究会

13日　集会委員会　総務委員会

16日　資料委員会　図書委員会

17日　00会

18日　三水会　インターネット小委員会　山研運営委員会　山の自然学研究会

19日　科学委員会　97同期会　アルパインスキークラブ

21日　百年史委員会

23日　海外登山基金委員会　学生部

24日　自然保護委員会

25日　高所登山研究委員会　つくも会

26日　青年部　98同期会　アルパインスキークラブ

27日　海外連絡委員会

30日　山の自然学研究会

31日　00会　7月来室者582名

日本山岳会会報　山　676号

2001年（平成13年）9月20日発行

発行所　社団法人日本山岳会

〒102－0081

東京都千代田区四番町5－4

サンビュウハイツ四番町

TEL　東京(03)3261－4433

FAX　東京(03)3261－4441

ホームページ:http://www.jac.or.jp

E-メール:jac-info@jac.or.jp

発行者　大塚博美

編集人　今村千秋

印　刷　株式会社　双陽社